

《研究集会の記録》

国際ワークショップ開催記

酒嶋 恭平

はじめに

2023 年 12 月 13 日、京都大学楽友会館 1 階第 1 会議室にて国際ワークショップ「The Afterlife of the Persian Wars: From Antiquity to Modern Times」を開催した。本稿はこのワークショップの開催記である。私が知る限り、少なくとも私が研究に従事してきた約 10 年間は、西洋古代史に関する公募形式の国際ワークショップが日本国内で開催された例はない。そういった意味で、開催までの過程をある程度細やかに紹介しておくのは、後に同じようなことを計画したいと考える院生や若手の研究者にとって無益ではないと思う。

ワークショップの概要

このワークショップは、後世におけるペルシア戦争の受容を、古代から現代まで幅広い時代枠組みから検討することを目的として開催された。主催は私、酒嶋と、エディンバラ大学の博士課程で私の同期であった Richard Kendall 氏、共催は千葉商科大学の師尾晶子先生（基盤研究 C：ペルシア戦争の遺産に関する通時的総合的研究：20K01060）と京都大学大学院文学研究科西洋史学研究室だった。開催型式はハイブリッドで、対面での報告者は 6 名、オンラインでは 6 名で、計 12 名の報告者を得た。報告者以外に、対面・オンライン参加合わせてほしい 15~20 名の参加者を得た。当日は会の後に懇親会を開催し、翌日には、渡日した報告者とともに京都市・宇治市内のエキスカッションを行った。

このワークショップの開催にあたり、私の念頭には 3 つの目的があった。ひとつは、ペルシア戦争終結から 2500 年の節目を超え、D. C. Yates, 2019. *States of Memory: The Polis, Panhellenism, and the Persian War*. Oxford and New York や G. Proietti, 2021. *Prima di Erodoto: Aspetti della memoria delle Guerre persiane*. Stuttgart などの出版を通して、未だ議論が盛んなペルシア戦争の受容史について、今どのような論点が可能か探り、研究者間で視点を共有すること。もうひとつは、一点目の一部として、私が当時エディンバラ大学で執筆していた博士論文「After the Persians: Memories of the Persian Wars in the Hellenistic Period」の成果の一部を世に問うこと。そして最後に、このワークショップを足掛かりに研究者間のネットワークを形成し、より規模の大きい国際会議の開催に向けた準備を行うことであった。

結果的に、このワークショップは主催である私と Richard の想定をはるかに超えた規模で開催されることとなり、カンファレンス・プロシーディングスの出版も予定されることになった。望外な成果を得たことは、ワークショップ成立に協力してくださった方々と、参加者の質の高い研究報告のおかげである。

公募まで

エディンバラ大学の博士課程に進学した頃より、自分の研究に関連した国際的な研究集会が開催できないか模索していた。日本にいた頃は海外研究者を招いたセミナーに参加し、海外とのコネクション形成の重要性や、専門以外の最先端の研究成果を学ぶ機会に恵まれていた。もし自分が大学で職を得た際にはこうした取り組みを引き継いでいく必要があると考えていた。エディンバラは研究集会開催の経験を得るのに適した場所だった。ここでは毎年のように院生が主体となる研究集会が開催されており、私が留学していた頃は、学生主体のイベントに充てられる基金も存在した。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大により

博論執筆が遅れ、ロックダウンが解除されてからは博論に加えてチューター業務や学会参加、ドイツへの3か月の短期研究滞在などもあって計画は全く進展しなかった。

2023年に入って私の身の回りも少し落ち着いた頃、Richardにこの計画を伝えた。彼は私の親友で、黒海北岸のギリシア都市の研究をしていたことから、ギリシア人の異民族観やペルシア戦争の文化的遺産についても私と興味を共有していたし、何よりすでに国際会議を数度主催した経験があった。彼は、意志があるならトライすべきだし、お互いの身分が安定している博士課程在籍中なら協力できる、とポジティブな反応を示した。彼の協力を受け、ワークショップ開催を目指して計画を進めることとなった。

まず決定したのは開催地と開催日程である。京都開催にしたのは、私が2023年4月に日本に帰国しており、非常勤講師の身分から京都大学の設備が一部利用可能であったこと、日英共催にすればより多くの開催資金確保の可能性があったこと、そしてアジアからの参加者も見込んでのことであった。開催時期は私とRichardの博論提出期限である2024年年初以前で、なおかつ欧米の参加者が京都開催でも比較的参加しやすい休暇直前という理由で12月になった。開催場所は、京都大学の洛北会館という施設に定めた。歴史ある建物で通信設備が整っており、プロジェクターの使用にやや難があること以外、完璧な施設であった。なお、開催場所や会の運営に関しては京都大学の藤井崇先生から多くの助言をいただき、この段階でワークショップを京大西洋史学研究室との共催にすることが決まった。

次に決まったのは、報告者を公募するということであった。一般に研究会議を開く際、報告者を招聘するか、募集するか選択することになる。報告者を招聘するなら招聘にかかる費用は主催者が負担する必要があるが、公募開催ならば参加者の渡航費や宿泊費を全額カバーする必要はなく、資金が十分確保できずとも開催自体に問題ない。ただし自分が求める人材を集める招待制とは違い、公募制では報告の質やワークショップのテーマとの関連性が十分に保証できない可能性が高い。その問題をカバーするため、応募の状況次第でキイ・ノート・スピーカーとしてこの分野で国際的に高い評価を受けている研究者を1名招待するなどの措置を取ることとなった（結果、この措置は取らなかった）。また、万が一報告者が主催を含め4-5人にも満たない人数しか集まらなかった場合には、ワークショップを中止することも決まった。

公募から開催まで

Classicistsを通して報告者の公募を開始したのは2023年5月のことだった。このClassicists（通称：Liverpool list）とはリバプール大学が運営している世界最大級の西洋古典学者のメーリングリストである。使用言語は主として英語だが、世界各国の西洋古典学徒が学会案内、報告者の募集、学生・ポストドク・教員の募集、奨学金の情報、本のデータのやり取りまで幅広く古典に関する情報交換を行っている。ここで報告者を募集すれば多くのレスポンスが見込めた。日本語での募集はしなかった。それは英語での報告に興味がある方はだいたいこのメーリングリストをチェックしているだろうし、近いトピックを研究していて報告が見込めそうな日本人にはこちらから声をかけていたためである。最初は3-4名程度から申し出があれば御の字と考えていたが、6月末の締め切りまでに思いがけず11名もの応募があり、断腸の思いで2名をリジェクトすることとなった。最終的に中国から2名、イタリアから1名、イギリスから2名、アメリカから2名、オーストリアから1名、イスラエルから1名の参加者を得て、これに主催者である私とRichard、そして共催となる師尾先生を加えて12名が集まった。学生が7名、大学に所属する研究者が5名、在野研究者が1名と身分に偏りのない構成になり、Marion Mayor教授やEran Almagor博士など、国際的に著名な研究者も参加されることとなった。

報告者の選定後は、会場、懇親会会場の予約、プログラムと要旨集の作成は主として私が担い、報告者との連絡と私の英語のチェックは主としてRichardが担う分業制を敷くことになった。しかし、7月頃に主催に対応できない問題が生じたため、師尾先生に協力いただく

ことになった。それがビザの問題である。日本での報告希望者のうち2名は中国の研究者であり、渡日にはビザの取得が必要であった。そのうち1名は研究者ビザ（正確には「短期商用等」を目的とする短期滞在用のビザ）での来日を希望したために、主催側で申請書類を揃えなければならなくなった。しかし研究者ビザの発行には、大学教授または准教授の招聘がなければならない。そこで師尾先生に依頼し、招聘理由書や在職証明書を作成していただいたというわけである。師尾先生は快諾してくださったが、大変な面倒をおかけしてしまった。この辺りは、国際的な研究集会を開催するにあたって常勤職を持たない研究者の泣きどころであると感じた。

また、プログラム編成にも困難があった。オンラインでの報告を希望した6名の大半は欧米在住であり、日本時間で日中に報告していただくのは不可能であった。こうした方々は、現地時間で無理のない時間帯に報告できるよう、日本時間で昼前と夕方に振り分けた。しかし、ラウンド編成の都合上、どうしても1-2名かは現地時間で深夜に報告していただく必要が生じたため、Richardの友人であったThompson博士に少し無理をして現地時間で深夜2時頃に報告していただくことになった。

時差の問題は、海外の報告者がすべての報告を視聴するのは不可能だということを意味した。私は報告を録画し、後にYouTubeのような媒体で限定公開することも考えていたが、Mayor教授から「そもそも20年前はオンライン報告がありえなかった。報告するチャンスがあるだけでも感謝すべきであり、そこまでの配慮は不要では」との助言をいただいたことで、報告の録画自体を中止することにした。

なお、ハイブリッド開催にあたり、京大西洋史研究室から優れたウェブ会議用のカメラを貸していただけることになった。これは当日本当に役に立ったし、会の円滑な運営はこのカメラに負うところが大きい。また古代史の院生が当日の会場設営や運営を手伝ってくださることになった。特に大野普希さんには、前日の会場・機器・施設の確認やプログラムの印刷にもお助けいただいたうえ、京都大学でのケータリングの注文にあたっても助言いただいた。

ワークショップ開催当日

当日は大変タイトなスケジュールの中、参加者の協力のもと、滞りなく会は進行した。プログラムは本稿の末尾に掲載したので参照されたい。会は4つのラウンドで構成され、第1ラウンドはアテナイ、第2ラウンドはスパルタ、第3ラウンドはアテナイ・スパルタ以外の土地におけるペルシア戦争の受容をテーマとする報告を集めた。第4ラウンドは広義の悲喜劇におけるペルシア戦争の表象を取り扱った。



当日の様子

ほとんどの報告はいずれ公になる予定があるので、ここでは各報告の概要をまとめるのではなく、主催者としてこのワークショップを通して得た感想を述べるに留めたい。

各報告は質が高く、公募型にしては非常にハイレベルなワークショップになった。また、幸運にも扱うトピックやテーマが重なる報告がいくつかあり、そのおかげで思わぬ相乗効果も見ることができた。例えば師尾報告と Mayor 報告はそれぞれヘレニズム時代とローマ時代を中心としたアテナイのエフェベΙΑ制度（若者の軍事訓練制度）を論じており、両報告を通してアテナイにおけるペルシア戦争記憶の継承過程を広い時代枠組みから描くことができた。また、第二ラウンドの Farris 報告、Thompson 報告、Bai 報告は共通して2世紀の旅記作家パウサニアスの『ギリシア案内記』を主史料としていたが、もっぱら文献学的な分析を行った Farris 報告に対して、Thompson 報告は考古資料、Bai 報告は碑文史料を用いて異なる角度から史料にアプローチしていた。その結果、ある報告で論じきれなかった論点を別の報告が補うということも見られた。

その一方で、今回のワークショップでは古代ギリシア・ローマやヨーロッパ以外の地域を焦点にしたペルシア戦争受容史研究の可能性が得られたことも大きな収穫であった。Richard 報告はスキタイ人の対ペルシア戦役の記憶を扱い、ギリシアの経験や未だギリシア中心史観に支配されがちな研究史を相対化する可能性を持っていた。他方、He 報告は日中戦争中にギリシア古典を中国語訳した羅念生を題材にしたもので、対日抗戦においてギリシア古典が果たした役割を強調するだけでなく、西洋近代の超克を狙って東西文明の対立史を語った京都学派との対応関係や、明治維新後に西洋古典がアジアで果たした役割について更なる考察の可能性を示唆するものであった。また、漫画『300』を取り扱った Engen 報告は、作品内の人種差別的な誇張表現を批判することに終始せず、作者であるフランク・ミラーと米国社会の関係や、ミラー作品の漫画的表現それ自体の発展を検討しており、漫画史研究として優れた成果であった。

また、私にとって意外だったのは、日本でのワークショップに多くの研究者が興味を持ったということである。公募を開始した当初は11名もの応募があると思っていたし、Richard を含め5名が渡日予定であったことは全く想定外であった（主催側にもう少し資金があればより多くの渡日を見込めた）。極東への渡航を希望する欧米の研究者はいるのだということが体感できたし、また今回のワークショップを通して、東アジアの西洋史研究者とのコネクション形成の重要性和彼ら・彼女らの機動力が理解できた。日本でも欧米で常々開催されているような公募型の国際会議は十分開催可能だと感じた。

総じてワークショップは成功に終わった。報告は押し並べて良質で、ペルシア戦争の受容史研究が古代史を超えて今後一層発展しうるテーマであることが再確認できた。当初の私の目的も十二分に果たされたと思うし、ペルシア戦争に興味のある研究者とコネクションを得ることができたことも大きな成果である。

なお、ありがたいことに欧文雑誌 *Orient* からワークショップのカンファレンス・プロシーディングスを出版する運びとなり、私も目下原稿執筆の最中である。順調にいけば2026年中に出版される予定である。

おわりに

計画立案から開催まで様々な問題が生じた。私と Richard の力だけでは決してこのワークショップは実現できなかっただろう。最後に協力してくださった方々への感謝の言葉で本稿を締めたい。

まず、共催として多くのことをお助けくださった師尾先生。先生なしにはこの会は不可能でした。また、同じく快く共催を許可くださった京都大学大学院西洋史学研究室の先生方。とくに藤井先生にはたくさんのことで助言をいただきました。それから、当日お手伝いをくださった京都大学大学院の大野普希さんと坂野水咲さん。特に大野さんには前日準備から懇親会までお世話になりました。上記のみなさまには改めて感謝申し上げます。また、聴衆として参加してくださったみなさまにも、改めて感謝申し上げます。平日開催にもかかわらず

国際ワークショップ開催記

わらず多くの方にご参加いただき、大変ありがたく存じます。

また、このワークショップは開催に際してエディンバラ大学歴史・古典・考古学部と Society for the Promotion of Hellenic Studies から助成を受けました。これらの資金は若手研究者の来日費用と会場設営費に充てられました。

ワークショップ・プログラム

The Afterlife of the Greco-Persian Wars: From Antiquity to Modern Times

Organised by:

Kyohei Sakeshima (University of Edinburgh)

Richard Kendall (University of Edinburgh)

Co-organised by:

Department of European History, Graduate School of Letters, Kyoto University

Prof Akiko Moroo (Chiba University of Commerce, Faculty of Commerce and Economics / “Diachronic Studies on the Legacies of the Persian Wars” JSPS KAKENHI Grant Number 20K01060)

Programme

9:00-9:30 Registration and Opening Remarks

9:30-10:45 ROUND ONE: Athens

Marion Meyer (University of Vienna): *Changing Memories and Places: Athenian Monuments for the Victory at Salamis*

Kyohei Sakeshima (University of Edinburgh): *Athens and Demetrius: Communication with a King through the Memory of the Greco-Persian Wars in the Early Hellenistic Period*

Akiko Moroo (Chiba University of Commerce): *Reimagining the Past: Athenian Ephebeia's Role in Shaping the Perception of the Persian Wars*

10:45-11:05 Coffee Break

11:05-12:45 ROUND TWO: Sparta

William T. Farris (University of Texas at Austin): *Augustus and the Iamidae in Pausanias' Spartan Agora: A Reception of the Greco-Persian Wars from the Second Sophistic*

Matt Thompson (University of Nottingham): *Competing Narratives and Sparta's Monumental Commemoration of the Persian Wars*

Shanshan Bai (Sichuan University): *A New Pausanias, Reshaping Collective Memory of the Persian War in Roman Spartan Leonidean Festival*

Eran Almagor (Independent Scholar): *Between the Greek Past and the Roman Present: The Afterlife of the Greco-Persian Wars in Plutarch's Parallel Lives*

12:45-14:20 Lunch

14:20-15:10 ROUND THREE: Other Lands

Richard Kendall (University of Edinburgh): *Did the Scythians Remember the Persian Wars?*

Yanxiao He (Tsinghua University): *Writing the Greco-Persian War in Wartime China: Reading Luo Niansheng's Tales of Greece*

15:10-15:30 Coffee Break

15:30-16:45 ROUND FOUR: In Performance

Holly Hunt (University of Oxford): *Misusing Marathon in Old Comedy*

Darel Engen (California State University San Marcos): *Frank Miller's 300 (1998): Batman at the Battle of Thermopylae*

Mattia Boscarino (University of Palermo): *The Reception of the Greco-Persian Wars in Contemporary Theatre: A Case Study from the Modern Performances of Aeschylus's Persians in the Greek Theatre of Siracusa*

16:45 End

(京都府立大学共同研究員)